タイワンアリタケの採取記録

技術士（衛生工学部門、生物工学部門）
環境カウンセラー（事業者部門）
本　堀　　雷　太

●タイワンアリタケ（*Ophiocordyceps unilateralis*）とは？

タイワンアリタケはチクシトゲアリなどのアリに寄生する気生型の冬虫夏草菌の一種です。タイワンアリタケに感染したチクシトゲアリは、湿度の高い場所に生えている植物の葉裏の主脈に噛みついて体を固定し、その状態で絶命します。その後、チクシトゲアリを栄養分として、体内にタイワンアリタケの菌糸が成長し菌核を形成します。湿度や温度などの条件が整うと子実体（いわゆる“キノコ”）を形成し、周辺に胞子を散布します。

タイワンアリタケは、宿主であるチクシトゲアリの脳をある種の蛋白質によりコントロールし、胞子の散布に適した植物の葉裏に誘導している訳で、まさにアリを“ゾンビ化”する菌類であると言えます。

今回は、豊田市の里山でタイワンアリタケに感染したチクシトゲアリの個体を数体採取してきました。

子実体を形成したタイワンアリタケ

●豊田の里山で採取したタイワンアリタケ

葉裏の主脈に噛みついて体を固定し、絶命した個体

体を折り曲げて落ちない様にしっかりと固定しています

葉裏に付いたチクシトゲアリの個体は 6mm程度です

体内で菌糸が増殖し、体節から菌糸がはみ出しています

首部から子実体が伸びています

若い子実体は薄い紫色をしています

老成した子実体は灰色を帯びてきます

子実体は分岐する事もあります

一枚の葉裏に複数のチクシトゲアリが導かれる事もあります

双方の個体とも葉裏の主脈にしっかりと齧りつき、体を固定しています

採取した個体を乾燥標本にしました

葉ごと台紙に固定しています